

# 西暦一千年紀の ユーラシア・インド洋貿易

佐藤彰一

私は2012年に岩波書店から『グローバル・ヒストリーとは何か』と題する一冊の翻訳書を出版しました。これは西暦2000年代に入ってから特に顕著になった、これまでの伝統的な「世界史」とは根本的に異なる発想で考えようとした地球規模の歴史的考察の盛んな出現を踏まえて、それらの試みを、それぞれ著者の発想の根底を規定している思考パターンを類型化することで整理しようとした書物です。著者パミラ・カイル・クロスリーは米国の清朝史の専門家で、自身も「グローバル・ヒストリー」を標榜する書物を、共著者の一人として執筆した経験をもっている歴史家です。

この書物を読みながら、第5章「システム」の部分に特に興味を覚えました。それは言うまでもなくエマヌエル・ウォラーステインの「近代世界システム論」や、ジャネット・アブールゴドの『ヨーロッパ覇権以前』のような、伝統的な歴史学と比較的親近性の高い著作を生み出している発想類型であったからです。この章でフランスの人類学者フィリップ・ボジャールが「世界システム」の発想を、紀元前四千年紀にまで遡らせて人類の歴史を再構成しようとしている事実を知りました。

他方で、私自身ヨーロッパ史の研究者として、以前からヨーロッパ空間の歴史的理解の伝統的な見方に飽き足らない思いをいただいていた。ヨーロッパがユーラシア大陸の一部であることは誰もが知って

いることですが、そのことの意味を研究のなかで「活性化」させている向きは少ないと感じていました。そうした心境であったところに、スウェーデンの先史考古学者クリスチアン・クリスチアンセンが英語で書き下ろした『歴史以前のヨーロッパ』(1998)を手にする機会があり、ここで展開されている議論に魅了されたのです。さっそく当時勤務していた名古屋大学文学部で開講した2000年度前期の西洋史特殊講義で、「先史ユーラシア世界の変動とヨーロッパの起源」と題してその内容を紹介しました。余談になりますが、学期末の試験問題は「紀元前一千年から前8世紀にかけての中央ヨーロッパ社会の展開過程を、同じ時期の地中海地方の諸社会の発展過程と比較しながら、その特質を明確にするような仕方でも論じなさい」というものでした。今のように予めきちんと講義題目を周知し、シラバスを作らなければいけない時代では、中世史の特殊講義でヨーロッパ先史時代を対象にする講義を組むのはそもそも不可能でしょう。我ながら乱暴な話ですが、学生諸君は大いに興味をもって聞いてくれたように思います。

\* \* \*

ユーラシア世界の一部としてのヨーロッパという見方は、2008年に岩波書店から刊行したシリーズ「ヨーロッパの中世」の一冊『中世世界とは何か』の序章、「[中世]を切り出す」の中で、まことに大まかではありましたが展開する機会がありました。その構想の根底にある考えは、クリスチアンセンから学んだものです。このようにヨーロッパ文明とその歴史をより大きなコンテキストなかで考えてみたいという私の願望は、フィリップ・ボジャールの『ジャーナル・オブ・ワールド・ヒストリー』に掲載された2本の論文、「16世紀以前のユーラシア・アフリカ世界システムにおけるインド洋」(2005)と「鉄器時代に想定される三つの世界システムから単一のアフロ・ユーラシア世界システムへ」(2010)を読むことで、実践的な足がかりを得ることができ

たと思います。その後、ボジャーは『インド洋諸世界』と題する巨大な2巻本を2012年に出版し、紀元前四千年紀から紀元後15世紀までの、インド洋を軸とした世界システムの隆替を詳細に論じています。

紀元前四千年であるとか三千年であるとかの遙か昔の人間の経済活動を、市場の存在を前提にした現象として理解するのは、これまでの通念ではなかなか難しいことです。ましてやそれを「世界システム」という概念装置でとらえるのは思いもよらぬ事態なわけですが、それが不勉強から来る偏見あるいは無知であることを、ボジャーの著書で教えられました。そこに掲げられていた5千点に近い文献リストのなかから幾つかをピックアップして読んだ末に、近年の古代オリエント史の急速な進展と問題の革新がいかに大きいかを思い知らされました。

その中の一冊に『古代近東の商業と植民』があります。スペインの考古学者マリア・エウヘニア・アウベルトにより書かれ、英語に翻訳されてケンブリッジ大学出版局から2013年に刊行された専門書です。「古代経済に関する論争」と題する第1部は、理論的側面をあつかった四つの章から構成されています。焦点はカール・ポランニーによって定式化されたテーゼ、すなわち交換の三つの形態である「互酬的交換」、「再分配的交換」、「市場交換」に関わります(図1)。ポランニーによれば、このうち近代以前の交換では「互酬的交換」と「再分配的交換」が支配していたこと、古代オリエントにおける取引は、神殿や宮殿/国家によって管理された活動であること、そしてそれは自由な商人によってではなく、神殿や宮殿により業務を委託された代理人によって行われたのであり、価格は前もって定められ、市場も市場地も存在しない取引であったことが論じられます。「市場交換」は近代に固有の交換形態であるとして、その独自性が強調されるのは、皆さんご存知の通りです。このポランニー説に対してアウベルトの著作は、近年の研究成果、特にアッシリア帝国が小アジアのカネシュに設けていた取引所から出土した楔形文字の粘土板文書5千枚や、その他の豊富な記録を

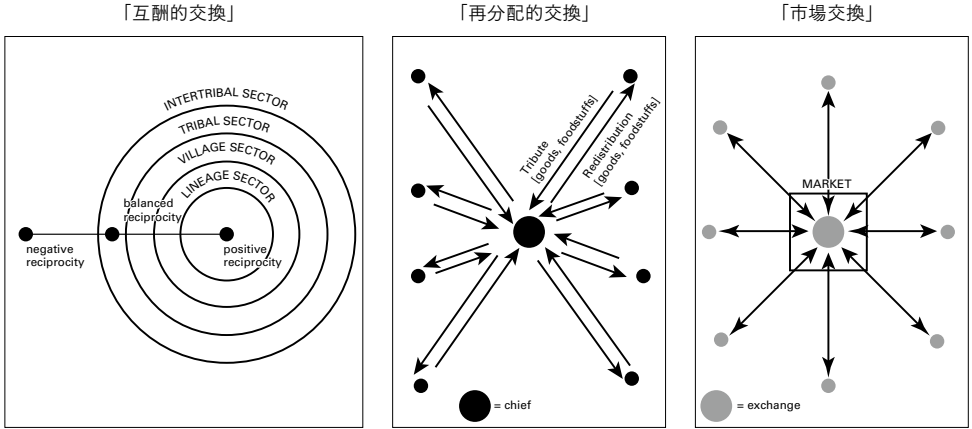


図1 カール・ポランニーによる交換の三形態  
 出典：Renfrew & Bahn (2012), p. 351.

支えに展開されてきた多くの研究によりながら、このポランニー・テーゼがもはや維持できない段階に至っている現状を綿密に解き明かします。ポランニー・テーゼの批判を展開するオリेंट史家のなかで、アウベルトが新近代主義者と形容するランバーグ＝カーロウスキーは、紀元前四千年紀のウルク時代に市場と資本主義的調整システムが存在したとまで極論しています。また米国のアッシリア学者マーヴィン・パウエルは前二千年頃のウル第三王朝の時代には銀を交換手段として、物価は需要と供給によって変動したとカネシュの粘土板記録から主張しました。近東考古学者デヴィッド・A・ウォーバートンは2003年に出版した大著に『そもその始めからマクロ経済学である。一般理論、古代市場、利子率』というやや挑発的なタイトルを付して、前二千年紀から金融操作が実践されていたこと、インダス河流域、メソポタミア、シリア、ペルシア湾、エーゲ海の諸都市は国際取引のネットワークで結ばれ、度量衡と銀による決済などの面で統一化されていたとまで述べているのです。

こうした大胆な主張を的確に説明しながら、先のアウベルトは、物

価や交換価値の決定において商人の社会的地位、市場の在り方、銀の役割などが相互に密接にリンクしており、その様相は体制や時代によって変化していると説き、最新の研究成果によりながら以下のように変遷のアウトラインを描き出しています。

文字記録の最初の時期から、商人を意味する用語ダム・ガル (dam-gar) が粘土板文書に登場しており、この表現は後のアッカド・バビロン語 tamkarum の起源となっているという点は研究者が一致して認めています。前三千年紀後半のラガシュ、ジルス、ウルなどから出土する粘土板では、ダム・ガルは家畜、魚、農産物を取引するのを生業とし、その活動範囲は自分の属する政治組織の枠内にとどまっています。これに対して、ガ・ラス (ga-ras) もしくはガ・エス (ga-es) と称される人は、遠距離の海洋貿易に従事した商人たちです。ウルの発掘で有名なチャールズ・ウーリーが、この都市遺跡の南東街区で発見した文書には、ダム・ガルやガ・エスの家族の記述があり、後者はペルシア湾を Dilmun (バーレン) まで旅し Magan (オマーン) の銅やインダス河流域に産するカーネリアン (紅玉髓) といった宝石や印章、イラン産の石製食器を入手したことを伝えています (図2)。彼らが商ったものは農産物と衣類などの手工業品でした。この取引で資金を提供したのは神殿であり、貿易商人は神殿に帰属し、その管理のもとに取引を行ったと言えるのです。その意味で、彼らは神殿経済とは無縁の純然たる私的な商業活動を実践する文字通りの商人ではありません。しかし重要なのは、彼らがそれと併行して、自らの私的な取引も行い利益を上げることが認められていたという事実です。

それから暫く後の前三千年紀末期、ウル第三王朝 (ca. BC2112-2004) は古代世界で最も多くの史料が残された時代です。テロ、ウル、ニップールからは合せて5万点の文書が出土し、その大部分が経済と国家の様々な管理文書なのです。ケンブリッジの著名なアッシリア学者ニコラス・ポストゲイトは昨年『青銅器時代の官僚制。アッシリアにおけ

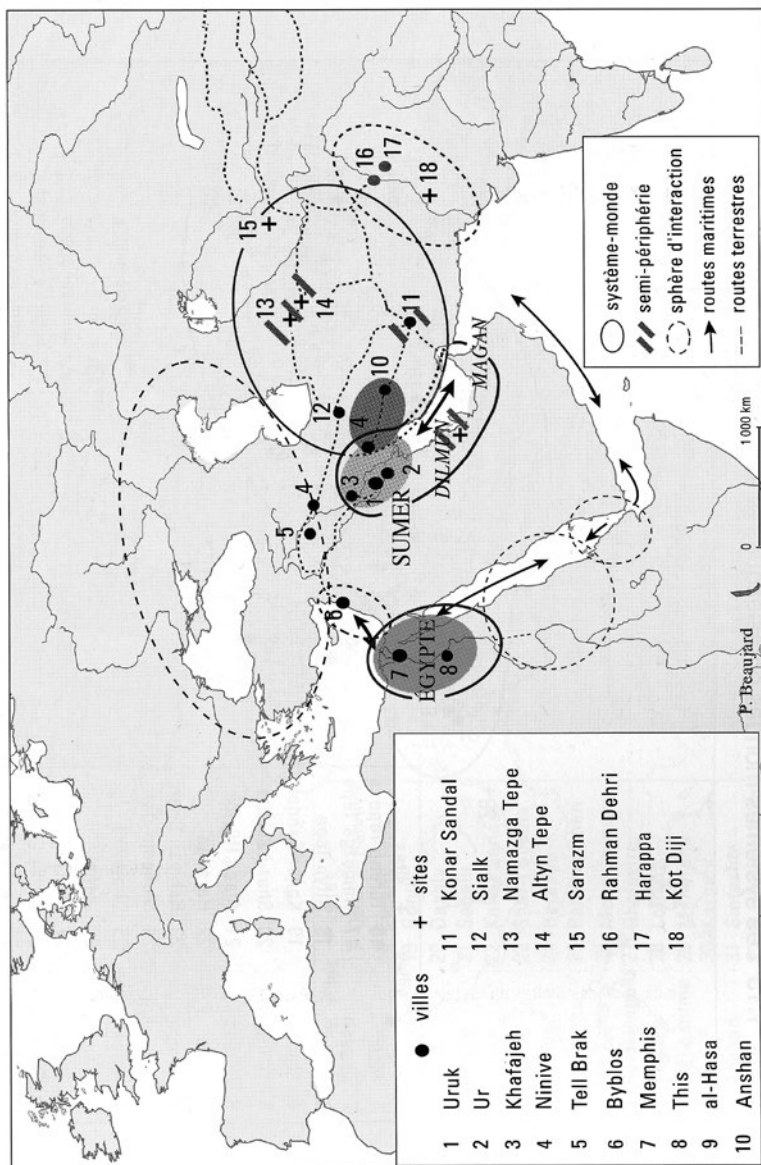


図2 前3100-2700年のアフロ・ユーラシア世界システム

出典：Beaujard (2012) t.1, p. 247.

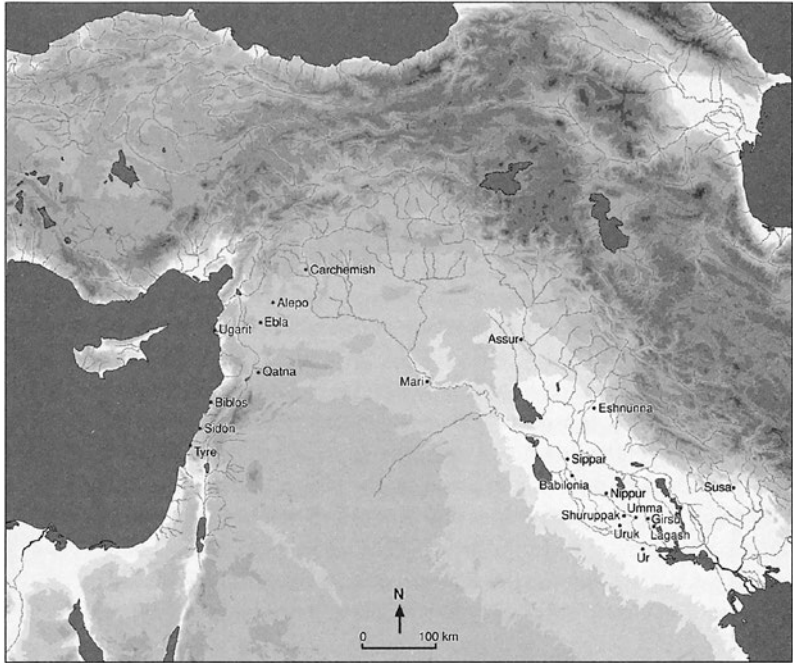


図3 ウンマ周辺図

出典：Aubert (2013), p. 119.

る文字記録と統治実践』(2013)と題する研究書を出版しました。そこで明らかにされるように、アナクロニズムとの批判が的外れなほどに、青銅器時代中期に文字記録が日常の実践として行われていた事実は、古代オリエント史家にとって常識であるということです。

さて、官僚制的中央統治が最も高度に展開したとされるウル第三王朝期の商人は前代同様に、神殿や宮殿などの代理人として取引を行う人々であったのですが、それと併行して自らの私的な勘定で取引を実践する商人でもありました。この王朝で最大の都市で、かつ地域間取引の要になっていたのがウンマです(図3)。ここからは有名な商人のバランスシート文書が見つかっています。そこでは国家が商人に取引

商品として供給できる物資が銀換算で示され、幾つかの商人グループごとに、貸方、借方の収支決算がなされ、それが半年あるいは1年ごとに役人に提出することが義務づけられて、それは国家の文書庫に保存され管理されたとされています。

そうした商人のなかでウル・ドゥムジダという人物については、まとまった記録が残っています。彼の父はセス・カラという名前で、やはり商人でした。ウル・ドゥムジダの兄弟もまた商人でした。ウル・ドゥムジダは32年にわたり商業に従事しており、国家とルカラという名前の政府高官のために取引を行ったとされています。国家からその都度銀、大麦、羊毛、胡麻油、香油、ナツメヤシの実、魚を受け取り、これを遠隔地に赴いて金、銅、樹脂、木材、蜂蜜などを購入したのです。彼が私的な取引も実践していたのは確かですが、それについては明らかになっていません。

もう一人ウル・ドゥンという商人のアーカイヴが知られています。その息子の印章から、父がダム・ガル、すなわち商人であることが判明します。父ナムハニから都市内外の地所と奴隷を相続した富裕な商人ウル・ドゥンは、30年間にわたって取引に従事しました。記録にはウル・ドゥンが取引に用いた印章が盗難にあったとき、直ちに町の伝令使が街路の隅々まで大声で、その印章が無効であることを触れ回ったことが記されています。商取引の保証措置にきちんとした仕組みが存在したことがここから分かります。彼は同じ商人仲間と協力して、遠距離の私的取引に勤しんだようです。新シュメール時代の商人もまた、国家的取引と私的取引の双方を併行して実践していたのです。

前二千年紀に入り、前1700年代のハンムラビ王時代における商人の状況は、有名な法典と粘土板記録の双方から、規範的な側面も含めて一層具体的に浮かび上がってきます。取引契約や商人ギルドの存在、地域間取引、遠隔地取引の一段の展開が実現しました。前二千年紀の中頃に、大きな転換が起こり、商人の存在形態にも変化が訪れたようで



す。前1300年にアシュールに生きたバブー・アハ・イディナは自らの文書庫を所有し、ヒッタイト王に直接手紙を書き、自分の娘をアッシリア王に嫁がせることができた有力者でした。文書記録が証明する私的取引の最盛期は前一千年紀の新バビロン王国時代です。有名なのは何世代にもわたる商取引の記録を有するエギピ門閥の例であり、この一族は当時のエジプト、シリア、エラム、アナトリアと取引を行い、銅、錫、金、銀、木材、葡萄酒などを輸入しています。

さて、この時代の市場も市場地の存在も証明されているのですが、そのことを詳しく紹介する余裕がありません。市場が存在したことを前提にして、物価変動について触れておかなければなりません。物価については公権力がしばしば容喙し、公定価格なども示されるのですが、基本は需要と供給により決定されたようです。通常の意味の貨幣はまだ存在せず、銀の秤量により大量物資の取引が行われました。ウル第三王朝期には金と銀の価格差は8対1でしたが、ハンムラビ王の時代には6対1になり、古バビロン王国時代には銀不足と金の大量流入で2対1という極端な比率を示すこともありました。ちなみにハンムラビ王の時代には鉄は金価格を凌ぎ、鉄1と銀8が等価であるという、信じられないような事態まで出現しました。しかし前一千年紀には鉄の価格が急落し、銀1と鉄225が等価となったのです。青銅器から鉄器への移行は、技術的側面よりも、鉄が青銅器に比較して安価であったことが決定的であったというのが専門家の意見です。銀1に対して、青銅は120という数字が知られています。鉄と青銅の価格差は鉄が1にたいして青銅は約2で、後者が2倍の値打ちがあったこととなります。物価変動の長期的トレンドも明らかになっており、前一千年紀を通じて物価は30パーセント上昇したことが分かっていますが、これは古代近東の度量衡が極めて安定していることから判明する事実です。アウベルトは前三千年紀のウル第三王朝末期が、市場経済に向かう転換点であると結論づけています。

\* \* \*

これまでその商人の存在形態を軸に述べてきたのは西アジアの状況ですが、前三千年紀に市場経済の萌芽があるとする見解は、青銅器時代からの世界システムを語るフィリップ・ボジャールの説でもあります。ここで彼の2巻本の大著の内容を逐一紹介する余裕はありませんが、彼はメソポタミア地方を中核とする西世界システム、中国を中心とする東世界システムに、前7世紀頃にインド世界システムが加わり、それらが前1世紀頃に結びついて、インド洋を基軸とするアフロ・ユーラシア世界システムが成立したと唱えています（図4と図5）。

さて、東地中海世界に目を転じると、前17世紀からミケーネ人が主導権を握り、ミノア文明の強い影響のもとに、中近東商業ネットワークの西の周縁部の発展を導きました。ミノア文明は東地中海全域、さらにエジプト、小アジアにかけての影響を伝達し、統合したのです。ミケーネ人は東地中海と中央ヨーロッパの間に、新しい影響の発信者となり、また受信者ともなりました。ミケーネ世界が影響力を揮うことができたのは、東地中海世界と中部ヨーロッパの双方に、必要な物資を提供できる能力を具えていたことにありました（図6）。

ここで少し脱線しますが、内陸西ヨーロッパと黒海・エーゲ海世界との交渉について一言触れておきます。フランスの古代ガリア学の専門家ジャン＝ルイ・ブリュノーは、近著『ケルト人。ある神話の歴史』のなかで、ストラボンやポセイドニオスなど古代ギリシアの地理学者が、古い文献からの引用として記述している、前278 / 277年におけるガリア人の小アジアへの侵入と、彼らのこの地への定着について論じています。後の小アジアのガラティア地方は、古代ギリシアの作家がガリア人を表現する際に用いる表記法の一つであり、現在のトルコの首都アンカラ周辺の「ガラティア」地方の名前の由来は、ガリア人の定着・植民に由来しているのです。紀元後4世紀末にガリアのトリー

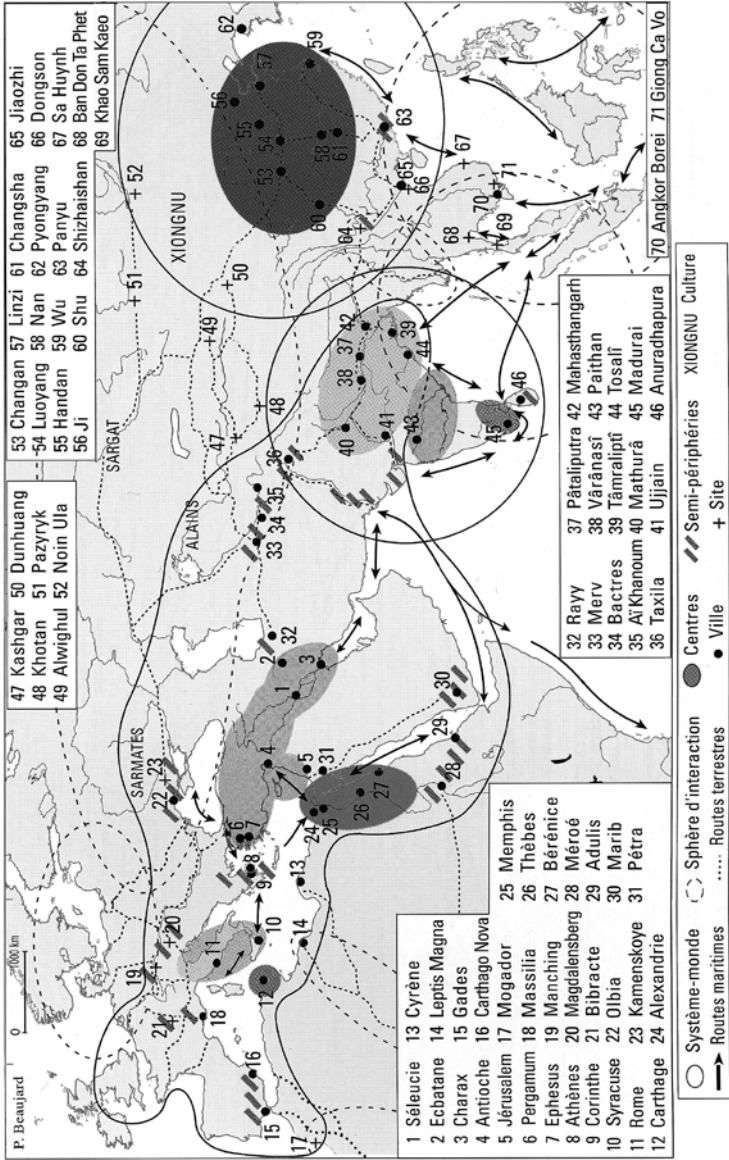


図4 前350-紀元前後のアフロ・ユーラシア世界システム

出典：Beaujard (2012) t.1, p. 323.

図5 前一千年紀アフロ・ユーラシア世界システム景況の同期性

出典：Beaujard (2012), t.1, p. 309-310.

	Égypte	Israël Pales- tine	Syrie Liban	O. Arabie	Anatolie	Grèce	Afrique N.	Italie
1000-900	+	+	+	+	?	+		-
900-850	+	+	+	+	M	+		+
850-800	-	+	+	+	+	-		-
800-750	-	+	+	+	+	-		+
750-700	-	-	+	+	M	+	+	+
700-650	-	-	-?	+	-	+	+	+
650-600	+	+?	M	+	-	+	+	+
600-550	+	-	-	-	+	+	+	+
550-500	+	+?	+	+	+	+	+	+
500-450	-	+	+	+	+	+	+	-
450-400	-	-	+	+	-	M	+	-
400-350	M	-	M	M	+	-	+	-
350-300	M	M	M	M	+	+	+	+
300-250	+	+	+	+	M	M	-	+
250-200	+	M	M	+	M	M	+	-
200-150	-	-	-	-	M	-	+	+
150-100	-	-	-	-	M	-	-	M
100-50	-	-	-	-	M	-	-	M
50-1	M	M	M	+	+	-	M	+

+ croissance

- récession

M situation intermédiaire

? situation indéterminée

N. Mésopotamie	S. Mésopotamie	Iran	Asie centrale ouest	N.Inde	S. Inde	Asie S.E. contin.	N. Chine	S. Chine
?	-						+	?
+	+						+	?
-	-		-				-	?
-	-		-				-	-
+	-	+	+				M	-
+	-	M		+			+	+
-	+	+	+	+			+	+
+	+	M	+	+			+	+
+	+	+	+	+			+	+
+	+	+	+	+			+	+
+	+	+		+			+	-
-	-?	-		+	+	+	M	+
+	+	+	+	+	+	+	+	-
+	+	+	+	+	+	+	+	+
+	+	+	+	+	+	+	+	+
-	M	+?	M	M	+	+	+	+
-	M	-	-	M	+	+	+	+
+	+	M?	+	-?	+	+	+	+
+	+	+	+	-?	+	+	-	+

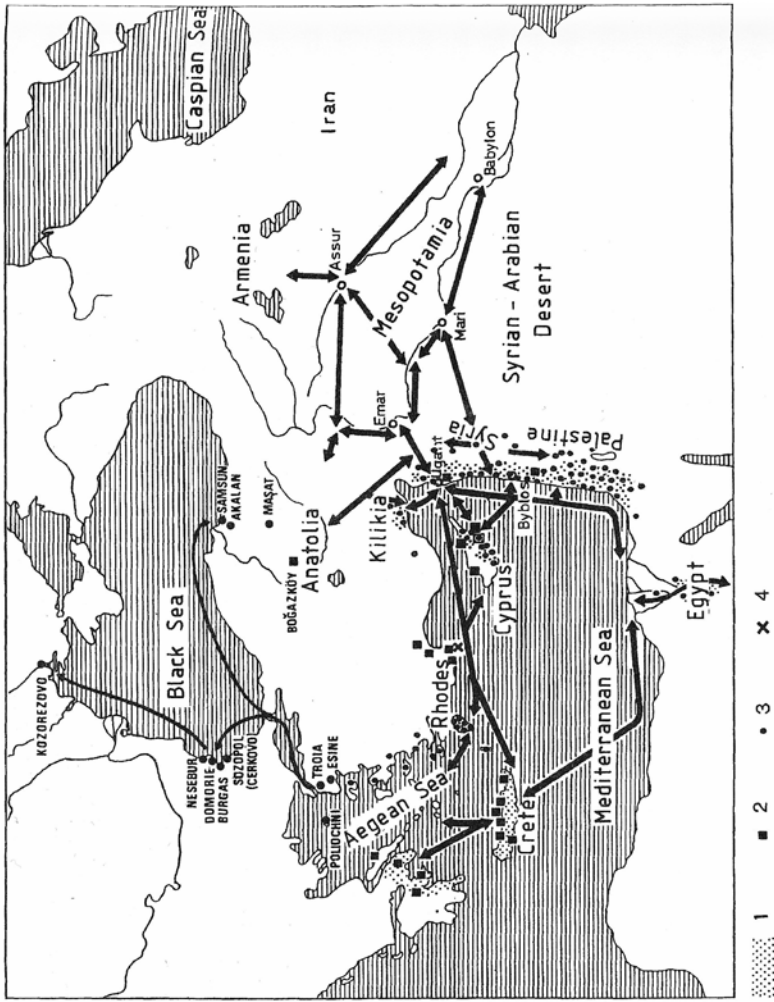


図6 前二千年紀東地中海の交易路  
 出典：Kristiansen (1998), p. 360.

アとガラティアの両方を旅した経験のある聖ヒエロニムスは、『パウロによるガラティア人への書簡講解』において、トリーア人とガラティア人の言語の類似に驚いています。この時期はクリスチアンセンの図式では「世界システム」が1世紀半にわたりブレイク・ダウンした時期に当たっていますから、先行する時代の地中海世界システム繁栄期に享受した財貨流入が途絶した、西・中部ヨーロッパ人のフラストレーションが引き起こした「ヴァイキング遠征」と解釈することもできると思います。西および中部ヨーロッパと黒海・エーゲ海地域との内陸路を介しての結びつきは、おそらく青銅器時代に遡る古さをもっていたのです。

さて小アジアの諸王国とミノアのいずれも、西ヨーロッパや中部ヨーロッパとの連携により、これまで不規則な形でしか利用できなかった新たな競合的ニッチを手に入れることができたのです。すなわち彼らは、西地中海や内陸ヨーロッパの交易者と黒海の交易者の両方と連携したのです。黒海への北方交易は小アジアの海岸都市を含む古い文化的・社会的ネットワークの一部でありました。これは潜在的に競争的關係であり、やがてトロイ戦争を引き起こすことになるのです。

前1世紀にローマがガリアと中央ヨーロッパの統制を掌握した後に、これらの辺境地帯では仲介商人が富裕となり、ローマの攻撃と「ゲルマン人」の進出の結果としてケルト人の政治経済組織が崩壊したのに続いて、大部分のオッピダ（高地集落）が、前一千年紀の終わりに消滅しました。ちなみに「ゲルマン人」勢力の動向を規定した政治経済的論理の働きの、最近ピーター・ヘザーによりかなり説得力のある形で説明されました。彼によれば、ローマ帝国の周縁部は外部世界とローマ経済との接触により、最も富が流れ込んだ地帯であったことから、「ゲルマン」部族集団は、そこにポジションを得ようと争いました。いわば帝国近接の周縁部の椅子取りゲームがその本質であったと言うのです（図7）。

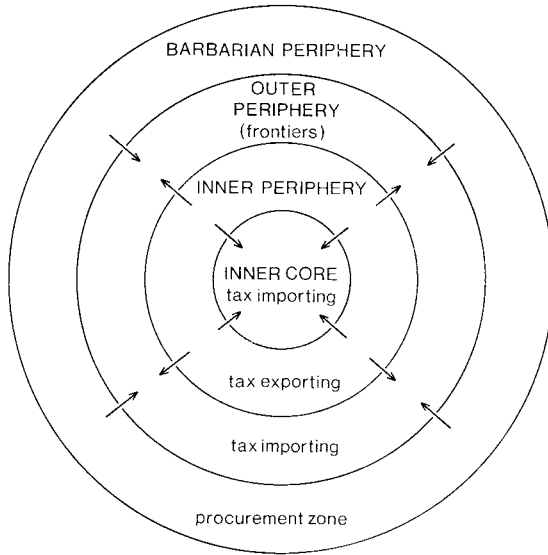


図7 「蛮族」移動の図式  
出典：Cunliffe (1988) p. 3.

さてローマによる征服は、イベリア半島の銀（カルタヘナ近くの銀鉱山では4万人の奴隷が採掘に従事した）や、キプロス島の銅、エジプトの小麦、北アフリカの木材や小麦などの資源を、直接収奪することを可能にしました。私的な企業家の階級が、国家の膨張と手を携えて発展したのです。ローマ帝国と東方の地との取引も増大しました。「シルクロード」を介しての漢帝国との交易はすぐに我々の脳裏に浮かびますが、それは象徴的な意味しかありませんでした。量的には海上取引が、遥かに大量の東方産品をローマにもたらしたのです。その様相は有名な『エリュトラー海案内記』にも記述されています（図8）。ローマ人は前2世紀からインドの西海岸だけではなく、さらに東方にも進出していたのです。彼らの貿易は前1世紀から西暦1世紀に発展しました。「オリент」の観念はこの時期生まれた（タキトゥス）とされています。それはギリシア・ローマと対置される観念です。大プリニウスは



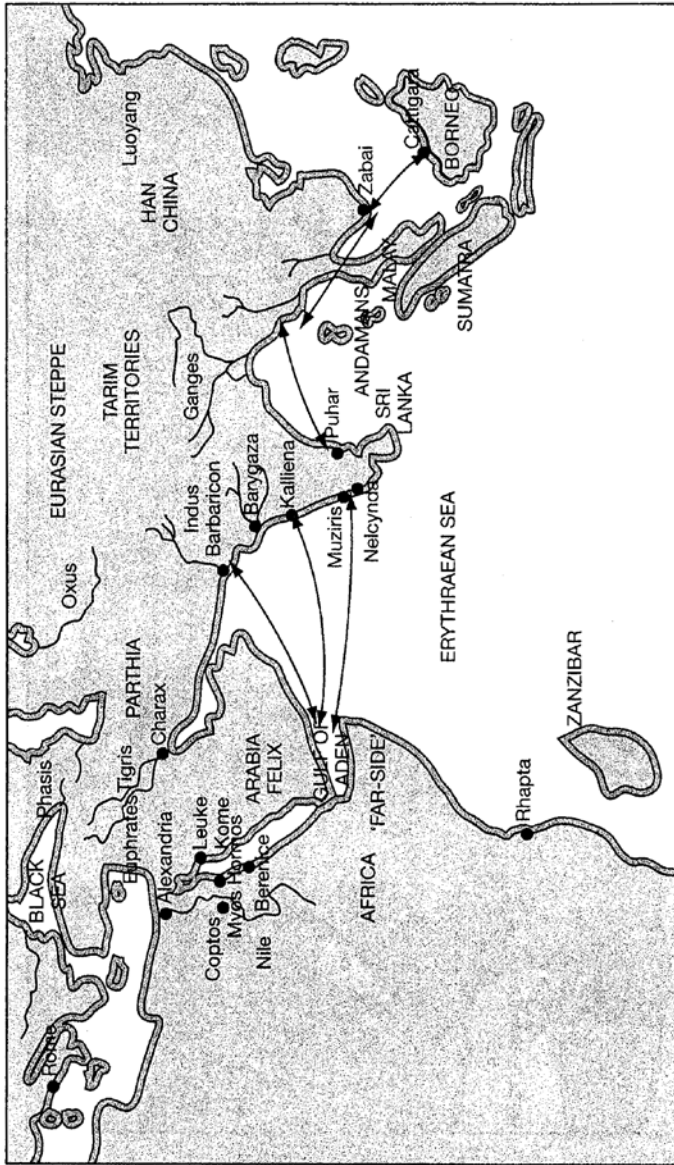


図8 『エリュトゥラー海案内記』時代のインド洋  
 出典：McLaughlin (2010) p. xv.

インド洋という言葉を最初に使いました。前一千年紀にインド以東への航海に用いられたのはペルシア湾であったのですが、今や紅海と地中海が重要な交易ルートとなりました。ローマにとって紅海ルートは、中央アジアや東洋に通ずる陸路をコントロールしているパルティア人を回避し、通商から閉め出すことで彼らを弱体化させるためにも必要な回路でした。大プリニウス（23-79）は、年間5千万セステルティウスという、ガリア全体からの税収入を上回る額が、東方物産の輸入に費やされていると、ローマの人士の奢侈に警鐘を鳴らしています。

インドやアフリカとローマが直接に交易したことは、南アラビアの諸都市に影響を及ぼし、様々の港がアラビア半島沿岸に発展しました。象牙、香料、繊維製品、真珠などの奢侈品や鉄などへの需要は、インド洋全域における商取引の拡張をもたらし、漢帝国の出現と相まって最初のアフロ・ユーラシア・システムを出現させたとボジャールは言います（図9）。ストラボンが、紅海の港ミオス・ホルモスからインドに向けて出航する船は、以前は年間20隻程度であったのが、今では120隻を数えるとしています。積載量千トンクラスが遠洋航海用の一般的な船であったのですが、ベレニケがミオス・ホルモスを出帆した船は、40日程度でインド西海岸（マラバル）のムジリスの港に到着しました。

これらの取引は私的な企業活動として行われました。帝国は取引物品に25パーセントの関税を課しました（アレキサンドリア）。ローマ人は貨幣、貴金属製容器、ガラス工芸品、地中海珊瑚を輸出しました。大プリニウスによれば、エチオピアの港からは象牙、犀の角、奴隷が積み出されました。交易ネットワークの国際化は、前2世紀のアレキサンドリアのある文書から知られます。それはおそらくソマリアと推定される、香辛料取引のための資金調達の記録です。借りの側の5名はすべてギリシア人名で、一人はスパルタ出身、もう一人はマルセイユ出身であり、貸し手もギリシア人名です。契約書に参与している人名はラテン名です。5人の保証人のうち4人が軍人で、一人はマルセイユ、一

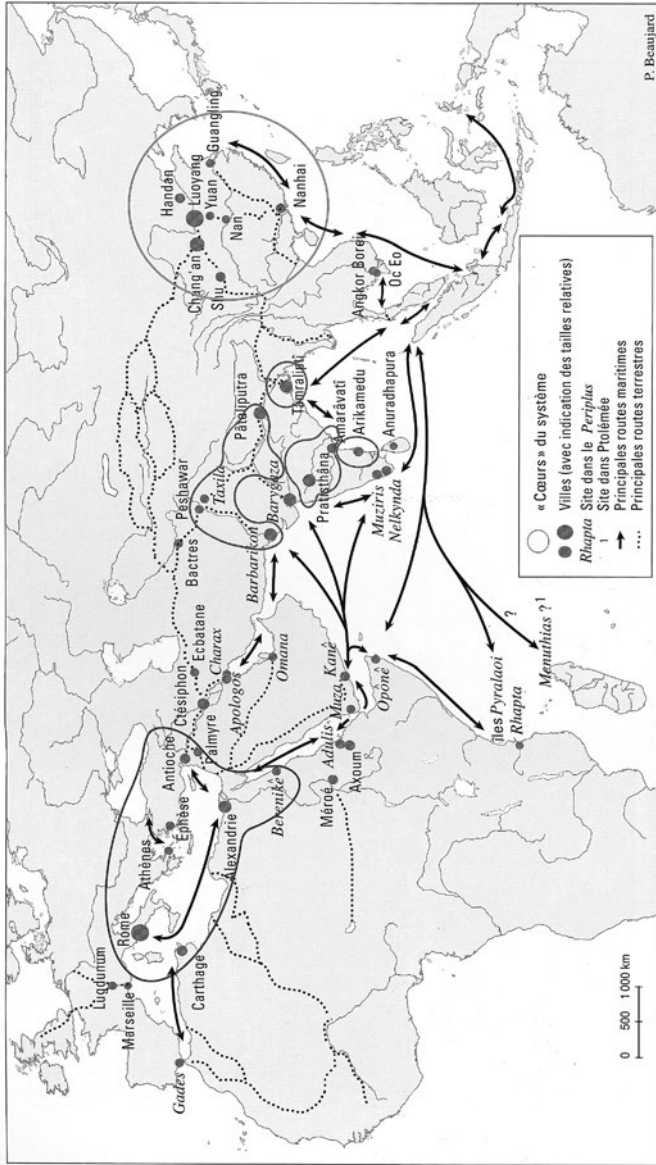


図9 1-3世紀のアフロ・ユーラシア世界システム

出典：Beaujard (2012), t.1, p. 324.

人はテッサロニキ、一人は南イタリア、最後の人物はカルタゴの出身です。

ウィーンに保存されている有名な西暦2世紀のパピルス文書はエジプトで作成された商業航海の契約書ですが、インドからアレキサンドリアへの積み荷としてナルド香油（甘松香）300~800キログラム、象牙1.2トン、木綿布350キログラムが記録されており、これだけで銀1154タラントと2852ドラクマの価値があります。ラテン語で木綿製品を意味する *carbasina* はサンスクリット語 *karpāsa* からの借用語であり、紀元後1世紀にプリニウスの著作に現れます。ギリシア人、ユダヤ人、レバントの商人たちがインドに赴く一方で、インド人商人もローマ帝国に到来したのです。アレキサンドリアにはインド人の居住区画がありました。ここを基盤として生まれたキリスト教のグノーシス主義は、インド人がもたらした仏教の影響によって作り出されたと考える専門家は少なくありません。紅海に面した港の一つレウコス・リメンに荷を積み出すナイル川の港コプトスには、パルミラの船主団体やアデン商人の団体が存在しました。ベレニケやレウコスの港では1、2世紀のものと推定される、タミール語やブラーヒーミ語で書かれた3点の陶片が発掘されています。

ベレニケで発掘された65点の栽培植物の種子や遺物のうち、6点がインドからの渡来植物です（図10）。大量の黒胡椒は、おそらくインド西海岸のマラバル地方から積み出されたものです。エジプトばかりでなく、帝国の辺境である現在のドイツやドナウ地方でも、紀元前11年から前7/8年頃の米が見つかっています。西暦1世紀にはドイツのノイスで196粒の米が発掘されています。エジプトで米の栽培が開始されるのが2世紀ですから、これがエジプト原産の可能性は薄いでしょう。ストラボンが、米がバビロンやスーサやシリアでも栽培されていたと証言しており、この地から到来したものかも知れませんが、インドからの輸入の可能性も排除できません。

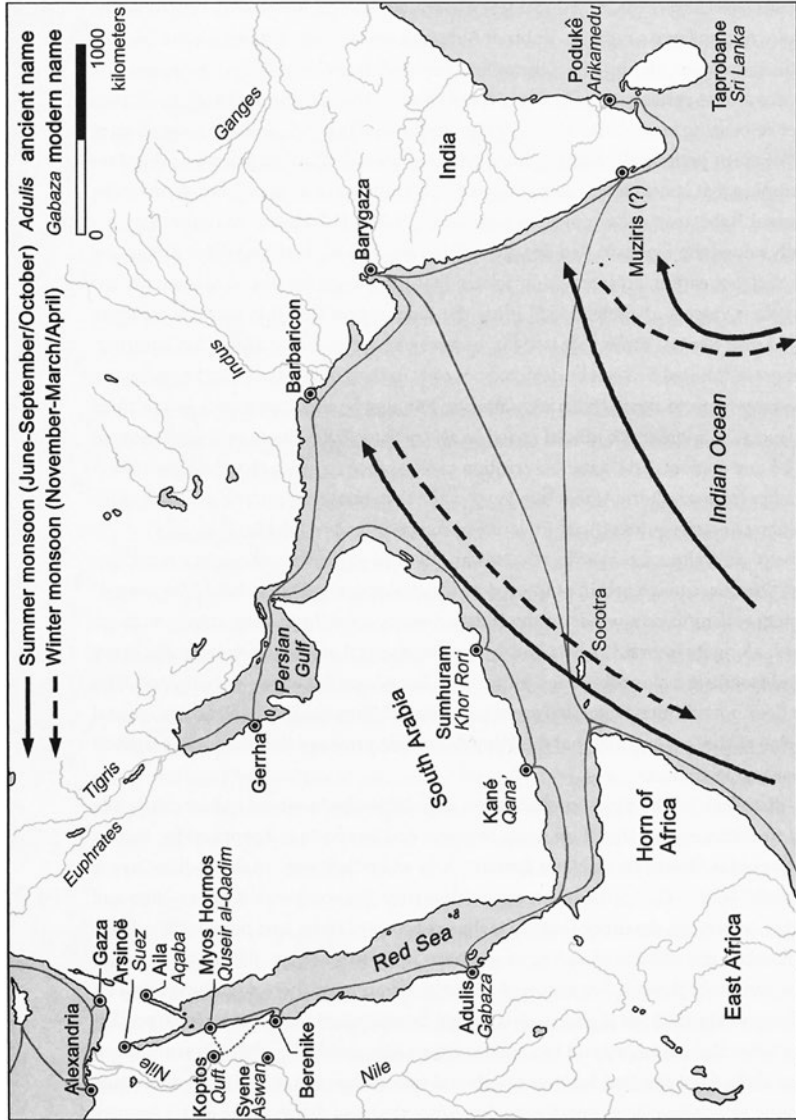


図10 バレニケとインド亜大陸  
 出典：Sidebotham (2011), p. 36.

インドに向けてはスペインの魚醤、葡萄酒、オリーブ油などが輸出されました。これら地中海の産物を容れたアンフォラがベレニケで見つかるのですが、それは東方に向けて積み出された輸出品です。インド東海岸のアリカメドゥには、西暦1世紀初めにローマ人の居住地があったとされています。

インドでのローマ貨幣の発見は、二つの地域で際立っています。いずれもベンガル湾に面した東海岸です。一つはタミル・ナードゥ州のコーヤンブトゥールであり、ここは地中海商人が熱心に求めた緑柱石の原産地であり、胡椒の産地でもありました。もうひとつがアーンドラ・プラデーシュ州のクリシュナ川流域です。ここでは西暦1、2世紀のユリウス・クラウディウス朝期の銀貨や金貨が発見されています。ことに小額貨幣である銀貨の存在は、貿易活動が多様であったことをうかがわせます。南インドではローマ貨幣がそのまま通貨として使用されました。インド産の物品はローマ世界では、元値の100倍で売ることが出来たとされています。

セイロン島では5万から6万枚のローマ貨幣が発掘されています。このほかインド貨幣、クシャン貨幣、サーサーン朝ペルシア貨幣、ビザンティン貨幣なども見つかっています。北インドでは安定した地方通貨が存在しており、ローマ貨幣を鋳潰して自分たちの貨幣を造りましたが、南インドでは独自の安定した通貨がなかったため、ローマ貨幣をそのまま流通させたことは、先に述べたとおりです。

東南アジアでもローマ貨幣が発見されますが、それはインド商人がもたらしたものか、場合によっては東ローマの商人が携えたものかも知れません。中国、南朝の『梁書』には、大秦（ローマ）の商人がしばしば扶南や交趾などを訪れたと記されています。歴史家フロルスは、アウグストゥス帝の時代に中国人あるいは中央アジア人の到来を伝えています。インド以東の人々の到来はほとんど知られていません。外交使節は例外です。前20年にアウグストゥス帝がアテネで、インドの

パーンディヤ朝の国王が派遣した使節を接見しています。スエトニウス、フロルス、アウレリウス・ヴィクトルらもインドからの使節の訪問を記録しています。トラヤヌス帝は107年にインド使節と会見しましたし、セイロンからの使節がクラウディウス帝(41-54)の時代に、バクトリアからの使節が紀元後2世紀にハドリアヌス帝やアントニウス・ピウス帝のもとを訪れています。アウレリアヌス帝が3世紀に、コンスタンティヌス帝が4世紀にそれぞれインドの使節を接見しています。361年にはセイロンの使節がユリアヌス帝により接遇されているのが知られています(図11)。

I. ウォラステインは遠隔地交易は専ら奢侈品の取引であると主張しているのですが、L. カッソンはインド人のペルシア湾岸地方やアラビア半島との交易は、原材料や日常的な農産物も含んでいたと考えています。

\* \* \*

『エリュトゥラー海案内記』やストラボンの『地理書』と、マルコポーロやイブン・バトゥータの記述などと比較しますと、興味深いことに、キリスト紀元の初めから商取引の拠点であったところが、その後も結節点となっていて、商業ネットワークの空間的配置がすでに定まっていたという印象を拭えません。紅海とインド沿岸部の航海は、2世紀には定期的に行われ、インドからの木綿布、絹、インディゴ染料、没薬、ミルラ、胡椒、香料、貴金属、鉄、奴隷、象牙、毛皮などはさほど変化は見られません。ローマの東方貿易は3、4世紀に衰退期にはいるものの、エジプトでの香辛料の使用は以前よりも増加しました。2、3世紀の疫病の蔓延後、エジプトの活力は蘇り、特に5世紀にはナイル川の洪水面は高く、モンスーンの力も強かったと考えられます。4、5世紀には大量のローマ貨幣が、マドラスやスリランカで見つかり貿易の活発さを証言しているのです。4世紀末にアンミアヌス・マルケリ

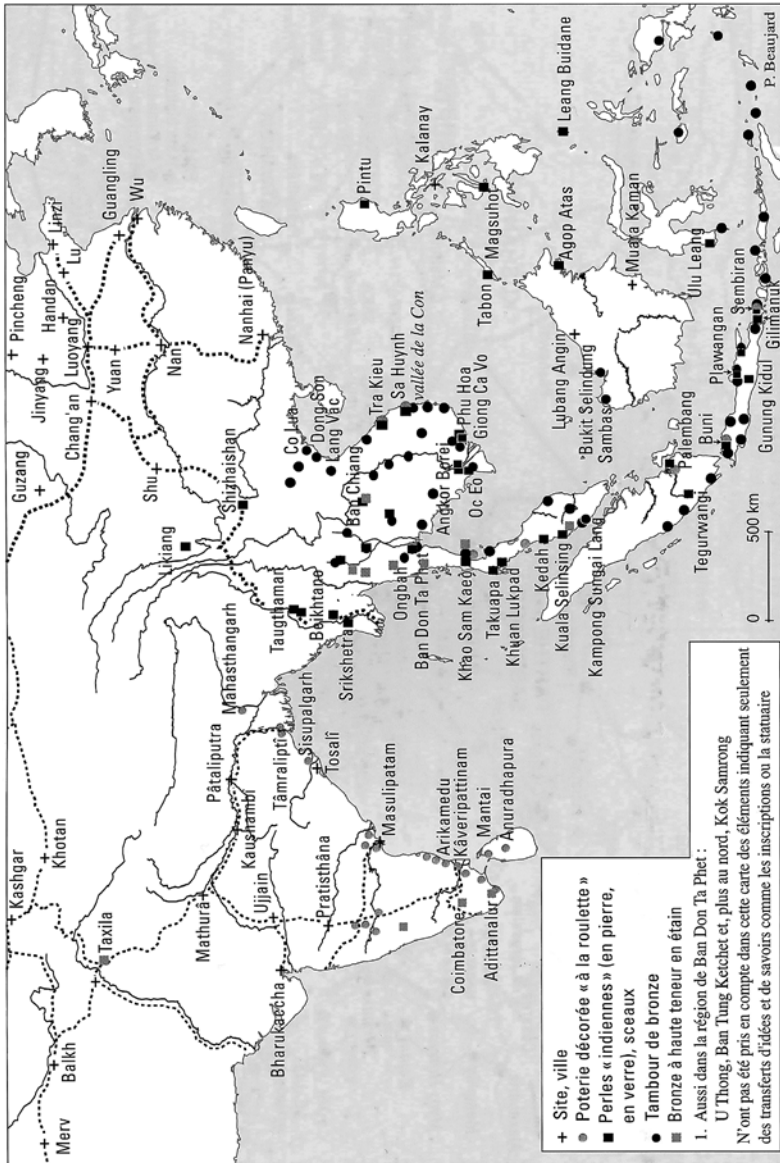


図11 インド・東南アジアにおける貿易活動の発掘遺物

出典：Beaujard (2012) t.1, p. 328.



一ヌスが、ローマであらゆる階層の人々が絹の衣服を纏っていると述べています。紅海に面したベレニケの港の活況の最盛期は1世紀から4世紀であり、ローマとインドの直接の交易は3、4世紀に次第に減少をみせるようになりました。衰退の最大の要因は、ローマ帝国の購買力の著しい低下であったと考えられます。サーサーン朝ペルシアが6世紀にペルシア湾とインド洋の取引を掌握し、アラビア半島以西の商船は、この海域から姿を消すことになるのです。

しかしまもなく7世紀のイスラームの勃興がありました。ことにアッバース朝カリフ時代のバグダードやサマーラのようなメガロポリスの建設に端的に示されている巨大な経済センターの誕生は、モーリス・ロンバルの死後出版となった数々の傑作で明らかにされています。東方では唐帝国が繁栄期にあり、こうした景況を受けとめることができました(図12)。

ローマ帝国の地政学的条件を継承した部族国家の雄たるフランク国家は、この強い経済的誘因に反応しました。ときあたかもシャルルマーニュ(カール大帝)の時代です。しかし復活した10世紀まで続く世界システムの好況期からヨーロッパ経済が引き出すことができた果実は極めて限られていたのです。基盤的原因は国家的インフラの相対的な未成熟です。またローマ時代のような巨大な商船を建造する人的資源も、技術も失われていました。貴金属資源に乏しく、古代において宝石の役割を果たした琥珀は、往時のような需要を喚起することはできませんでした。ヨーロッパがイスラーム世界に供給できた最大の資源は、先史時代から「輸出品」としてきた奴隷、すなわち人間でした。あとはガラス製品、刀剣などの武器類といった一般的な消費意欲をさほど刺激することがない産物でした。中世ヨーロッパ経済が本格的な発展過程に入るのは、アンリ・ピレンヌの説に従うならば、シャルルマーニュ期に胚胎し、おそおそとした長い助走期間を経て12世紀に一挙に開花するという流れが、最近の主流的な考え方と言えます。



\* \* \*

時間の関係で、ドニ・ロンバルが「東洋の地中海」と形容した南シナ海やジャワ海を中心とする東南アジア海域の紀元前後から7世紀頃までの貿易について、最近研究の進展があるにもかかわらず触れることが出来ないのが残念です。中国とローマ世界をつなぐ海上ルートの実態は、1千年紀の世界システムを考える上で大切ですが、別の機会にしなければなりません。とにかく近代的進化に囚われた、われわれの思考法を根底から再構築する必要があることを強調して、私の話を終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

この報告は、2014年5月30日に立教大学池袋キャンパスで開催された、立教大学文学部公開講演会で読まれた草稿に、若干手を入れたものの、ほぼそのまま活字化したものです。「西暦一千年紀」とはキリスト紀元1年から1000年までを指していますが、報告では実際には、それに先立つ紀元前三千年に遡る中近東研究の最近の動向の紹介に大きなスペースを割き、西暦一千年紀後半についての論及はわずかにとどまっています。専門領域が西洋中世史である私としてはまことに忸怩たる思いなのですが、メタヒストリカルな水準でしかないとはいえ、古代オリエント史の専門家以外の方々には必ずしも浸透していない最近のこの分野の研究の展開、ことに「世界システム」論の観点からのアプローチの注目すべき動向は、すべての分野の歴史家にとって有用と考えたからです。結果として、「西暦一千年紀前半」に全体的なバランスを失するほど時間を割いてしまい、その分「西暦一千年紀後半」の議論が過度に手薄になってしまいました。宿題となった部分に関する考察は、いずれ機会をあらためて果たしたいと考えております。

最後にこの講演会を企画し、様々なご配慮を賜った立教大学文学部史学科世界史学専修のスタッフの皆様にあらためて感謝申し上げます。

## [追記]

当日私とともに演壇に立たれた東京大学教授深沢克己氏は、「近世ヨーロッパと地中海—南フランスの作業場から」と題する素晴らしい講演を行ないました。活字化の段階で、筆者とおなじく深沢氏も元原稿に手を入れられましたが、その部分に私が考える「グローバル・ヒストリー」について多少の誤解があるように思われますので、[追記]のかたちで補足し、できれば誤解を解きたいというのが本旨です。

氏はグローバル・ヒストリーとは何かについて、これを揚言する歴史家によって意味づけが異なると妥当な認識をされた上で、次のように述べておられます。「いずれにせよ世界史を統一的な論理のもとに整序し解釈することが可能である、という暗黙の前提に立脚しているように思います。したがってこの包括的な「全体史」は、視野の限定された個別研究または「部分史」よりも上位にあり、個々の部分的現象を包括的文脈のうえに配置することにより、はじめて高次の普遍的説明をあたえることができる、という仮説に依拠しています。もしそうだとすれば、これは唯一客観的歴史を構成するはずですが、はたして歴史認識はそういうものか、わたくしは疑問に感じています」。

本講演録収録の拙論を見ていただければ分かりますが、当日私は原稿のなかでグローバル・ヒストリーとは何かについて、私自身の見解は一切述べておりません。また、引き合いに出したパミラ・カイル・クロスリーの『グローバル・ヒストリーとは何か』も、「グローバル・ヒストリー」という新たな歴史記述ジャンルのありうべきナラティブの形式を探究した書物であって、さしあたり歴史の客観性要求とも、普遍的説明とも無縁な内容です。したがって上記の深沢克己氏の疑問は、私のグローバル・ヒストリー理解に向けられたものではないとして、ここで[追記]を終わりにしてもよいのですが、折角の機会ですので私自身が歴史学という学問をどのように考えているかを、簡単に説明して補足しておきたいと思います。

端的に言えば歴史学は「尺度の学問」という考えです。これはフランスの近代史家ジャック・ルヴェルのアイデアですが、歴史家が所与の歴史を考察する場合、いかなるタイムスケールを選択するかが非常に重要であり、自らが行なうナラティブに相応するタイムスケールを選択しなければならないという主張です。これはC・ギンズブルクのマクロ・ストリアを念頭においての議論ですが、マイクロレンジ、ミドルレンジ、グローバルレンジなど区分はいろいろあるでしょうが、ナラティブの統一性を考えるならば（ナラティブ以外に歴史の内実があるでしょうか）、ひとつのナラティブにおいてタイムスケールの一貫性は保持しなければならないのです。したがって、これら異なるタイムスケールの「歴史」には、そもそも序列関係はなく、どれがより客観性が高いかという議論もあまり意味がありません。これらは同時に存立しうるのであり、その意味で歴史学は多元的（決して相対的ではありません、なぜなら歴史家は、その都度の学的実践においてタイムスケールを選ばなければならない、それはその限りで絶対的な要素であるのですから）な学的実践であると思われるのです。言うまでもなくナラティブの選択は、そのナラティブが指向する意味論的内実にしたがって選択されることになります。グローバル・ヒストリーは、グローバルなタイムスケールと空間的広がりを選択した歴史ナラティブと見なせるのです。それはおそらく文明史的なナラティブに好適な記述ジャンルでしょう。歴史の客観性は、合理的な思考の持ち主による史料解釈手続きの「客観性」と定義するほかはなく、歴史の真実とは「最良の歴史家が真実と認めただけだ」（マルク・ブロック）という、まるでポスト・モダンを思わせる言辞によって表現される内実に尽きるように思われるのです。

参考文献：

- Janet Abu-Lughod, *Before European Hegemony. The World System AD 1250-1350*. Oxford: Oxford University Press, 1989. (ジャネット・L・アブー＝ルゴド『ヨーロッパ覇権以前』佐藤次高・ス波義信・高山博・三浦徹訳、2巻(岩波書店、2001年))
- Maria Eugenia Aubert, *Commerce and Colonization in the Ancient Near East*, transl. by Mary Turton, Cambridge: Cambridge University Press, 2013.
- Philippe Beaujard, *Les mondes de l'Océan Indien*, t. 1. *De la formation de l'État au premier système-monde afro-urasien (4e millénaire av. J.-C. -6e siècle ap. J.-C.)*, t. 2. *L'Océan Indien, au coeur des globalisations de l'Ancien Monde (7e-15e siècle)*. Paris: Armand Colin, 2012.
- Philippe Beaujard, "The Indian Ocean in Eurasian and African World-Systems before the sixteenth century", *Journal of World History* 16 (4), p. 411-465.
- Philippe Beaujard, "From three possible Iron Age World-Systems to a single Afro-Eurasian World-System", *Journal of World History* 21 (1), p. 1-43.
- Jean-Louis Brunaux, *Les Celtes. Histoire d'un mythe*. Paris: Belin, 2014.
- Pamela Kyle Crossley, *What is Global History ?* Cambridge: Polity Press, 2008. (パミラ・カイル・クロスリー『グローバル・ヒストリーとは何か』佐藤彰一訳(岩波書店、2012年))
- Barry Cunliffe, *Greeks, Romans and Barbarians. Spheres of Interaction*. London: B.T.Batsford, 1988.
- Barry Cunliffe, *Facing the Ocean. The Atlantic and its Peoples*. Oxford: Oxford University Press, 2001.
- Barry Cunliffe, *Europe between the Oceans: Themes and Variations, 9000 BC-AD 1000*. New Haven: Yale University Press, 2011.

- Peter Heather, *Empires and Barbarians. The Fall of Rome and the Birth of Europe*. Oxford: Oxford University Press, 2010.
- Ivan Jablonska, *L'histoire est une littérature contemporaine. Manifeste pour les sciences sociales*. Paris: Seuil, 2014.
- Kristian Kristiansen, *Europe before History*. Cambridge: Cambridge University Press, 1998.
- Maurice Lombard, *L'Islam dans sa première grandeur (VIIIe-XIe siècle)*. Paris: Flammarion, 1971.
- Maurice Lombard, *Monnaie et histoire d'Alexandre à Mahomet*. Paris: Mouton, 1971.
- Maurice Lombard, *Les textiles dans le monde musulman du VIIe au XIIe siècle*. Paris: Mouton, 1978.
- Denys Lombard, *Le carrefour javanais. Essai d'histoire globale*, t. 1. *Les limites de l'Occidentalisation*, t. 2. *Les réseaux asiatiques*, t.3. *L'héritages des royaumes concentriques*. Paris: EHESS, 1990.
- Raoul Maclaughlin, *Rome and the Distant East: Trade Routes to the Ancient Lands of Arabia, India and China*. London: Continuum Press, 2010.
- Nicholas Postgate, *Bronze Age Bureaucracy. Writing and the Practice of Government in Assyria*. Cambridge: Cambridge University Press, 2013.
- Jacques Revel, *Jeux d'échelles. La micro-analyse à l'expérience*. Paris: Gallimard-Seuil, 1996.
- Steven E. Sidebotham, *Berenike and the Ancient Maritime Spice Route*. Berkeley & Los Angeles: University of California Press, 2011.
- Immanuel Wallerstein, *The Modern World-System: Capitalist Agriculture and the Origins of the European World-Economy in the Sixteenth Century*. New York: Academic Press, 1974. (イマヌエル・ウォーラーステイン『近代世界システム 農業資本

主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』川北稔訳、2巻（岩波書店、1981年）

- David A. Warburton, *Macroeconomics from the Beginning. The General Theory, Ancient Markets, and the Rate of Interest*. Neuchâte / Paris: Recherches et Publications, 2003.
- 佐藤彰一『中世世界とは何か』（ヨーロッパの中世1）（岩波書店、2008年）
- 佐藤彰一「解釈学と時間 歴史テキストの時間性」松澤和宏編『テキストの解釈学』（水声社、2012年）、353-374頁